

福岡電気ホール。

川本声水氏 かねて病臥中のところ十月八日逝去、享年七十九、謹弔す。

よもやま (敬称略)

○：錦心流演藝会研究演奏会 九月二十二日 東京浅草吾妻橋会館(主催同会) 川中島、内田琴水、小栗栖、杉本淳水、白虎隊(上)、佐藤皓水、薄陽江、熊木施水、菅公、入江、薄水、茨木、伊藤馨水、秋海棠、石田源水、新撰組、菊地甘水、白虎隊(下)、松本諸水、石重丸、後藤朗水、西郷隆盛、松田殊水、竜の口、関恵水

○：故藤井義次師追悼演藝会 九月二十八日 東京芝菜根(主催同会) 飯盛山懐古、鈴木密水、乃木將軍、岡野間水、弁の内侍、村木錦鷹、御夢の跡、大石棠水、墨絵、池野谷吟岫(以下贊助) 栗津の巴、望月岫、江、彰義隊、大村鼓城、城山、柿本錦波、俊寛、浅野晴風、木立の月影、田辺錦波、武蔵野、辻靖剛

○：神港旭会秋季演奏会 十月十日神戸国際会館(主催同会) (第一部) 常陸丸、叶本治、小松原、相沢経代、太田道灌、浜野珠風、絃柴田旭堂、吉田松陰、河野旭棟、植田旭心、岩切旭永、国田旭純、絃大鏡旭寿、伽羅の兜、竹本旭寿、秋風故郷の山、大鏡旭晶、安富郁子、絃旭寿、菅公、鎌田旭榮、絃旭堂、五絃段、旭文、旭弘、旭榮、旭詔、旭棟、旭晃、旭晨、旭心、旭将、旭川、旭保、旭操、旭璋、旭桂、旭昇、旭壽、旭城、旭詔、旭和、旭晶、叶、安富、柳の精、小旭堂、旭華、羅生門、宮村旭当、岩切旭永、絃旭堂、旭璋、吉野山懐古、岩切旭永、絃堅田落、秋元旭晨、義士本懐、稲田旭晃、噫無情、旭城、旭晃、旭当、旭純、旭堂、安至、旭晶、安宅の関、大西旭明、大楠公、池田旭榮、壺坂寺、野阪旭樹、月に偲ぶ、松岡旭文、額田王、柴田旭堂、尺八、箏合奏、若き教盛、旭川、旭詔、絃旭堂、旭昇、旭昶、旭璋、立方

(第二部) 荒城の月夜奏曲、旭保、旭操、旭璋、旭昇、旭桂、旭昭、旭和、旭華、旭晶、尺八、箏、湖水渡、鎌田珠川、絃旭堂、王昭君、旭晶、安富、絃旭保、旭壽、等、大徳寺、小田旭都、絃旭堂、児島高徳、珠光、絃旭堂、旭棟、旭心、立方、龍の口、旭壽、綱館、旭八、旭純、絃旭堂、旭桂、旭璋、本能寺、珠菜、珠山、絃旭棟、船守、旭昭、旭棟、旭川、絃旭堂、茶白山、前田旭千、老公漫遊、旭陽、坂本竜馬、旭保、巡礼お鶴、喜多旭脩、天の羽衣、旭旭昭、旭昶、絃旭壽、旭艶、旭晶、旭桂、立方、外に詩吟四題

あ 錦繡の秋収穫の秋まきに酣、文字通り野にも山にも秋が来た、全国の演藝界も将に酣である。各地からの演奏会の朗報は引きもきかず、特に二大組織を誇る錦心流一水会と筑前旭会の全国大会が前者は十月二十六、七両日東京で、後者は十一月二十二、三両日福岡で開催されるのは誠に有意義で単に技を競うだけでなく一年ぶりに相逢う同志が手を取り合っただけでなく暖める光景は本当にほほ笑ましく見ても楽しい。どうか徒らにお祭り騒ぎにのみ走らぬよう主催者側の温情を喚起したい。

昭和四十三年十一月一日発行(非売品) 編集者 植村 冀 水 発行所 京 絃 社 京都市北区衣笠西馬場町二九 和田第一ビル 二〇一号 電話 八三二六 八二七六番 内線 二〇一 番

琵琶 機関紙

京 絃

第一七三号

京 絃 社

「平家物語」の物語 (二〇)

坂落 (さかおとし)



七日の卯の尅に九郎御曹司、その勢三千余騎にて一の谷の後(うしろ) 鴨越に打ち上げ、城郭遙かに見くだしておはしける処に、その勢にや驚きたりけん、男鹿二つ妻鹿一つ、平家の城郭一の谷へそ落ちたりける。

独特の地形は、今も合戦当時の様相をしのぼせる。

平家の拠点はこの一谷にあった。義仲を破って勢いを盛り返した平家は、寿永三年正月福原へ帰り、東は生田の森、今の神戸市生田区が生田神社附近から西は一の谷の間に城を構えていた。前に開ける海上も平家が制していた。

世に有名な一の谷の合戦。この歴史の一角は義経の秀れた武将の面目と、関東武士の勇猛さをみせた一戦であった。

之を攻撃する源氏軍は義経一万余騎、範頼五万余騎の大軍。しかし一挙に平氏を叩くのは容易でない。義経には出発当時からプランがあった。一の谷の背後鴨越からの奇襲である。

五月晴れの或る午後一の谷の上空を飛ぶ。波静かな須磨浦海岸の青さが目にしみる。海辺近くまで鉢伏山、鉄拐山の緑の急峻なスロップが迫っている、この間の谷が一の谷だ。猫のひたい程の平地、頭上から逆落とりに攻めたてられては逃げ口は一ヶ所、無限の水をたゝえた海しかない。それが空から見るとよくなる。鉢伏山頂には展望台、ロープウェイも通っている。そして一の谷に押寄せせる人家。源平古戦場は一変していた。が、一の谷

千騎は一の谷西の木戸口へ。範頼の五万余騎が生田の森東の木戸口に進み、同時に攻める合図の時間、一およそ東西の木戸口、時を移す程にもなりしかば、源平数を尽して討たれにけり。矢倉の前、逆茂木の下には人馬の肉山の如し、一の谷の小篠原、緑の色を引かえ

て、薄紅にぞなりける。海の下には討たれ斬られて死ぬるは知らず。一と壮烈な戦いは、平家の敗走、海への脱出によって終る。鴨越の逆落とすは義経の武将としての二つの特徴を発揮した。一つは三草山の戦いで既に見せた奇襲戦法、それも単なるトリックプレイではなく、少数精鋭で果敢に攻める手段である。後の屋島の戦でも登場するこの戦術は、平家の戦術には嘗てなかったものであり、いわば関東武士の特色の一つとして平家物語の作者も考えていたのだからと学者は云う。今一つは自ら陣頭に立って戦場を駆け廻ること。義経は軍司令官と同時に野戦の隊長であった。鴨越の逆落とすの場所は諸説あって定かではないが、非常な急坂だったことは平家物語原典にも窮られる。そこを「馬どもは主君が心得て落さんずるには損すまじかりけるぞ、重ね落とせ、義経を手本にせよ」と真先に駆け下る。これも義経だけでなく、当時の関東武士の理想的なあり方として、平家物語の作者が強調したかったのではあるまいか。実際、武士特に下級の武士階級にとっては、戦場での功名だけが明日への出世を約束される時代である。一の谷合戦の戦端を開いた源氏の熊谷直実、平山季重の先陣争いも、河原太郎、次郎兄弟の憤死も、結局は自己主張の姿だった。義経の活躍は当時の下級武士達の願いを代弁しているのではなからうか。

切抜帳から (三四)

平井春嶺

○終戦の真相 (一二)

ソ連に仲介を申入れることについては、東郷外務大臣も反対でしたし、いろいろ議論もあつたのですが、そういうことに定つたわけの一つは、先にも申し上げました通りソ連が兵力をソ満国境に集結して、満洲をうかがう態勢を示しているのについて、ソ連の満洲侵入を防止する必要があるのに積極的にソ連に仲介を求めれば、申さば「窮鳥懐に入れば獵師もこれを殺さず」とのとえもありソ連の満洲侵入を防ぐのにも効果があるという考え方もあつたわけですが。

然るにソ連は日本に宣戦を布告して来たのであります。条約の如きは全く一片の反古として了しました。

後で判つたことではありますが、ソ連はこの宣戦布告を正当づけるためにスターリンは「この宣戦布告は日露戦争に於いて日本から受けた侵略に対する仕返しである」と言ったのであります。

スターリンの先輩レーニンは、日露戦争の時に、これを以って帝政ロシアの侵略戦争であるといつてモスコに於て革命を企画し、これが後年共産主義革命の成立する動機となつたのであります。レーニンがロシアの侵略と規定致しました戦争を、スターリンは日本

の侵略と規定した。全く出鱈目であり、ただソ連の火事場泥棒の利己心という外はないのであります。

あとで調べますとその前のヤルタ会談に於て、米国のルーズベルト大統領からスターリンに対し、日本に宣戦をしてくれということをお願いしているのです。その代償として南樺太及び千島をやるという約束をしていたのでした。しかもスターリンは仲々これを実行せず、日本がすっかり参つてもう戦争が終つていう時につけこんでこの挙に出たのであります。普通道徳的に考へても正義などということはどこにもありません。全く不道徳の極致であり、利己心もここに到ると極れりと申す外はございません。しかもソ連は後に申します如くポツダム宣言に違反して捕虜を十年間も返してよこさなかつたのであります。

今日このソ連と結ぶ方がよいと考えたり中にはソ連を自分の祖国と考える人がいるのですが、私(迫水久常氏以下同じ)にはどうしてもその気が判りません。

さてソ連宣戦についてはその後続々として情報が入りました。夜明け方には新京が爆撃を受けたこと、ソ満国境にはソ連兵の侵入を報じて来ました。

私は午後五時一件書類を取纏めて総理を私の私邸に訪問しました。丁度外務大臣も来られました。総理は私共の報告を受けられると唯一言「来るものが来ましたね」といわれ、兎も角参内して陛下に申上げてくるからと言つ

て直に参内されました。

間もなく総理は官邸に帰られ私をお呼びになつて、よく陛下に御報告申し上げ陛下のお思召を伺つてきたからここでポツダム宣言受諾という形式によつて終戦することにします。よつて書記官長はそれぞれの段取りを考えて間違ひなく取運ぶようにとのお話がありました。私はほんとうに涙が出ました。緊張でありました。そして当時の制度に従つて国家の意志を決定するに於いて必要な手続を順次にとることとし、最高戦争指導会議および閣議を次々に開く手配を致したのであります。(以下次号)

次号は「終戦に対する八月九日の御前會議の状況と大御心の有難さ。」

たぬき親爺

桂 旭 采

家康は天下をとつたが、まだ大阪城には淀君が秀頼を擁して、何人かの大名を抱えて一帝国の鯨があつた。だが関ヶ原の敗戦後はあの純忠をたゞえられた加藤清正らも、実は家康と闘うなどとは思つていなかった。一説には家康に毒饅頭を食わされて死んだと云われるが、兎も角、豊臣の支えとなつていた幾人かの大名家は、次ぎ次ぎと年をとつて死んでゆき、秀吉の忠臣もきそつて関東の徳川側と縁

組みした。大阪側の頼みは只一つ、遺子秀頼が成長し大人になって行くことだつた。

関ヶ原後十年、無気味な時代が過ぎたのも「熱柿の落ちるまで待つ」という家康らしいやり方であつたらうか。そして十一年目の某日、突然家康は秀頼の京都来訪を命じた。時に秀頼十九才、大阪城の動揺は大変なもので、十年間も豊臣方をほつておいた家康が、まさか、という意見もあり、あの狸親爺、いよいよ秀頼公をおびき寄せて殺す気だ、と言ひ出す者もあつて城内は騒然。特に淀君は強硬派で、既に軟化していた加藤清正、浅野幸長らのいさめ、やつと秀頼の京都行を承諾し、緊張裡に家康、秀頼会見の儀が終つたが、實際家康は何のためにこのような事をしたのか、一応は謀殺を考へたのかも知れない。或いは家康の「なぶり殺し」の第一段階か。

ついで家康が大阪方に要求したのは、大阪方の金銀を消費させるための神社仏閣の建造修理である。これは家康が大阪方の財制的基礎崩壊をねらう独得な手で、仲々芸が細かい。処が、京都方広寺大仏殿再興の際、完成した大仏殿を見廻つた家康側の僧が、鐘銘にある「国家安康」の四字を、家康の字を二つにさいて家康を呪うものだと騒ぎ立てた。この背後にはこの銘を造つた僧をねたむ五山の勢力や林羅山が居たという説もあるが、凡そ云いがかりは何とでもつく。家康は学問好きで僧を何人も近づけ、これが一種の陰謀の局となつていたのではないか。

勿論大阪方には他意ある筈がなく、直ちに釈明のため賤ヶ岳七本鎗の一人で、方広寺造営奉行の片桐且元を派遣して弁解につとめたが、腹に一物の家康は頑として聴き入れない。史上且元に就ては「忠臣説」と「裏切者説」があり疑問が多いが、こゝで家康は且元に榮達を約してスパイにしたという説もあるし、或いは且元を工事責任者として豊臣の財宝を出来るだけ多く使わせようとする家康から、五千石の加増を受けているというので、奉行に

京絃社移転

十月一日から左記に移転致しました

京都市北区衣笠西馬場町二九

和田第一ビル 二〇一室

電話 八三三六 八二二七 六六六

内線 二〇一番

(市電「金閣寺前」下車徒歩五分)

ある。 兎も角、事取捨策として且元は「秀頼の母を人質として関東側に渡す」「大阪城をあけて秀頼を他に移す」「秀頼が江戸屋敷を貰つて参勤する」との三案を言上した。

後世の且元びいきには、この案が通れば豊臣家は明治まで存続していたという甘い考えもあるし、文豪坪内逍遙も「桐一葉」で且元忠臣説を主張しているが、この且元の妥協取

拾案を見た大野治良らは烈火の如く怒り遂に交渉断絶、大阪冬の陣の幕は切つて落とされたのであるが、狸親爺の腹芸は見事に當つて家康は雀躍して喜んだという。

深みゆく秋の洛北 (下)

琵琶歌大原御幸悲曲を偲ぶ

辻 旭 城

寂光院へゆくにはもと来た道を戻り、再び敦賀街道に出て大原川を渡ると約一・五料、美しい楓並木に囲まれた石段を登ると正面に本堂が見える。

「祇園精舎の鐘の聲……哀れにも悲しい薄命の女性、建礼門院の隠れ住んだといわれる寂光院。ゆかりのあるこの寺は聖徳太子が建てられて、縁起によるとご本尊六万体の腹籠り地藏尊を安置したと言ひ伝えられる尼寺である。

平家が西海に滅んで寿永四年に清盛の娘で安徳天皇の御生母、建礼門院徳子が西海から帰り、東山の長楽寺で仏門に入り修業ののち本院にはいられ、高倉天皇、安徳天皇および平氏一門の冥福をひたすら祈られた。その時に思ひきや深山の奥にすまぬして 雲居の月をよそに見んとは 今や夢昔や夢とたどられて いかにと思へどうつつとぞなき

などとよまれて、わびしい年月を送っておられたが、建保元年五十七才でこの寺で亡くなった。

文治二年四月、後白河法皇がここにこられたことは、平家物語や源平盛衰記で知られ、琵琶愛好者や沢山の人が今もなお当時の遺跡を留めるものとして訪れている。歌人と謝野晶子は昔を偲んで、洛北の尼寺の青葉の影に「ほととぎす治承寿永のおん国母、三十にして経よます寺」と詠んでいる。

この寺は慶長八年豊臣秀頼の母淀君の願いによって再興の計画があり、漸く着工はしたものの、大阪落城のために中止になり修繕だけにとどめたということである。

現在あるのは本堂、書院、弁天堂などで、本堂には木造の地藏菩薩の立像のほか、建礼門院の像、阿波内侍張子像などが安置されている。書院は近代的に建てられていて、襖画は、大原御幸の巻に因んで京都の画家が描いたとのこと。寺域は草生の谷奥にあって、翠黛山を負い、いわゆる、峯に木伝うましろの声、しずの妻木の斧の音の幽かにもれる幽すい閑寂の仙境で、紅葉の名所として名高いところである。

このほか、大原御幸のゆかりの深い境内の苑池、汀の桜、岸の伊吹、翠黛山のたえずなどを目のあたりに見て、記者はありし昔を偲び、しばし歩みをとめて胸にしみるものがあった。

狂醉亭漫録 (四十二)

古谷 竟水

前回赤穂浪士への分配金を一万六千兩程と記したが、この内より後始末の準備金や諸寺及び後室に贈る分を差引き、その残金を分配したのであり、記述不備の点はお詫びして茲に訂正する。又前回記載の戸田采女正は、内匠頭の従弟である事も申添える。

茲で浅野の後室瑤泉院に就て略記すると、彼女は約十家もある浅野同族の中の備後三次の城主浅野土佐守長澄の家から輿入の方で、舟橋聖一の小説、新忠臣蔵では長矩とは幼な馴染で入興後は密より甘い琴瑟相和した恋女房であり綿々たる相愛の様子を詳細に描写されているが事実はそうでも無かつたらしい。

幼な馴染の確たる証拠も無く却って外様大名である芸州浅野本家が、幕府の外様待遇圧迫方針に備う可く一族の結束を目的とした政略結婚と見る方が正しい様だ。幕府が特に厳しく強行した参勤交代制により在国の節は夫人を人質的に江戸表に住わせる慣例もあり、一年置きに別居に拘わらず、壮年の長矩は赤穂にも江戸にも側室を置かず、当時の大名生活としては珍らしい事であり、恐らく之は例の寵重癖により欲求を充たして居たとも判断され、小説の如く甘い仲では無かつた様だ。

話は飛ぶが吉良仇討直後泉岳寺へ引揚げの途中一行が芝將監橋に差掛った際、儀具の内藤萬右衛門がその母と共に此の附近に居る事を知って居る大石と堀部弥兵衛が「一走り家へ赴き母と兄に今生の別れを告げて参れ」と言ったのに対し儀具は「一旦志を決した上は最早私親は省みませぬ」と答えたとの此の話は美談として伝えられたが、事実母や兄は儀具と殿様との関係を潔しとせず自然疎遠であつた為心中忸怩たるものあり断つたとも思われるが這般の事も長矩の夫婦仲に無関係でない様にも想像される。又十年近い夫婦仲に拘わらず子供が無かつた事も不思議である。

併し史書には、松の廊下事変直後片岡の注進を受けるや瑤泉院は、直ちに懐剣で緑の黒髪を絶ち切り「遅かれ早かれ切る筈のもの、せめて我君御生害の前に」と毅然とした態度であつたとあり、美談ではあるが当時の習慣上仕方なく諦めて行つたとも解される。浅野家離散の内命を知るや、彼女は一糸紊れず端然として轎に乗り、青山の実家浅野土佐守邸へ向つたとある。時に二十八歳であつた。

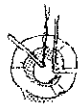
後日談になるが、歌舞伎や浪曲等で演ずる「南部坂雪の別れ」と云う物語が伝つて居る、梗概は愈々討入決行の十二月十四日の午後大石は紋服姿に改め、奴姿の寺坂吉右衛門を供に、赤坂南部坂の、瑤泉院の父浅野式部少輔長照の下邸に彼女を訪れ、大事決行を打明けする予定の処、側近一人の侍女の挙動不審に気づき、瑤泉院より仇討は何日かと聞かれたの

に対し、其の意志は更々無いと告げたので、彼女は怒って大石一味の不忠を詰り、その挙句持病の癪を起して倒れる。大石は其場に侍した小野寺十内の妻戸田の局(此は嘘である、十内の妻阿丹は赤穂藩士灰方藤兵衛の妹で有名な賢夫人である。小野寺が京都留守居役であつた関係上仇討前後には京都に止り仏光寺東洞院の浪宅に居た筈である。夫婦共文事風流の道に通じ、殊に阿丹は和歌に長じていた。此夫婦の書翰等は後世に数多く残り、赤穂事件の正確な史料となつて居るが、茲では紹介を差控える。)に対し、今後の討入計画書や藩離散以後の会計報告書を一封にして托し辞去する。其夜その封書を盗むべく例の怪しの侍女が戸田を襲う所を、之も侍女の一人の、堀部安兵衛の妻お幸(之も嘘だ、本稿第六回に記した通り、お幸後の妙海尼は年令差から安兵衛とは結婚して居ない。)が得意の早業で曲者を取押え、嚴重取調べの結果吉良方のスパイと判明する。この騒ぎに瑤泉院も起き出で、戸田から例の一封を受取り開けて吃驚初めて大石の忠節の次第を知る。折から夜も白々明けの頃門の扉を叩く者あり、通して見れば討入姿の寺坂吉右衛門で、仇討成就の御注進である。早速瑤泉院は前非を詫び復讐成功の祝辞の使者として戸田の局を泉岳寺へ差向け、自身は仏前に灯明を点じ亡君に仇討の次第を報告すると云うのが南部坂の一席である。然るに史書は此の件に就ては、只会計報告の一冊を、大石が、飛脚に仮装した寺坂

に届けさせた事のみを認めて居る。而も鳩巢の義人録は十二月十三日、靦瀾の報警録は十二月十五日朝と記している。然し鳩巢は小谷勉善を通じて浅野家に詰め、南部坂の一件は嘘説である事を明確に証明して居る。

「しゃつきょう 石橋」

柿本 錦城



大江定基は参議齊光の子、仕官して三河守となり、無常を感じ出家して寂照と号し東山如意輪寺に住し天台を学び、仁海僧正に随い密教を受け、長保四年支那に渡り真宋皇帝に挙げられ蘇州僧録司に補し円通大師の号を授かり我が長元七年杭州に寂せり、詩文に長じたりと云う。唐は支那に行く事、渡天は印度に行つたこと、即ち各所の旧跡名所等を廻つた。清涼山は文殊菩薩の浄土に拠し支那仏教の一大霊地として朝野の崇敬篤く慈覚大師を始め入唐僧の多くは此処を訪れた、現時も山上に居るラマ教徒の勢力大なりと云う。

石橋は清涼山に入る関門に属し天の浮橋とも云われ、伝説には天地の間に懸かると支那では思われている。実尺は三丈、巾は一尺にも足らず苔蒸して渡らんとすれば滑り落つると云う。下を流れる谿は大漢の白波雲と巻き身の毛もよだつ程である。神姿は不可思議の

意、笙歌は音楽の妙音、天より花降ると古書にあり、箏笛琴瑟は琵琶と共に楽器の名、法華経方便品に浄土では絶えず是等の妙音が鳴り響くとある。獅子舞は舞楽の曲名、太平楽と共に聖徳太子が唐土より移入したものと伝えられ、四天王寺供養の際に舞わしめたのに始まり、正徳二年三月観山行幸記にも迎陵頻、胡蝶の後、獅子舞の曲ありと記されている。能楽の獅子舞も舞楽から転化したもので、神事の内にも多く其の例があり、現在各地方に普及されている獅子舞は能楽から生れて俗化したものとされている。其うち長唄や歌舞伎の石橋は割あい能の型を残しているが、獅子は百獣の王と云われ、牡丹の花に戯れる古事は支那では国花とまで愛され、目出たき花である処から獅子に配されているが絵で目出たい行事には必ず此の曲を舞われたと云う、舞楽は皇室の保護に依り、能は將軍始め諸大名の保護を受け現在も盛んに祝事に用いられている。

石橋は能楽作者が演劇的要素を取り入れてワキ役として大江定基を用いたに過ぎず、従つて奥山の厳しい環境の中で荘厳な文珠の浄土を背景として獅子舞を見せることを目的としたのが此曲であるからワキ役やツレの案内老人には餘り重きを置く必要はない。團乱舞も舞楽の曲名、初は時節の意、たいきんりきんは獅子の頭に玉のあるものが大巾玉なき頭を利巾と云い又は大筋力ともあり頭とは獅子を演ずる被り物、獅子の座は通常仏

体の座を獅子座と呼ぶ。こゝでは舞い納めた獅子頭を元の座に直す意である。黄金のずいは瑞に直せば判り易いと思ひます。  
(あとがき)  
前号掲載の「新作石橋」は謡曲より取材せるため語呂の悪き箇所は巧妙な節調で効果を上げ、崩れの弾法はタツプりと願います。

### 新曲 哀史サイパン島

長浜 南城 作詞

嗚望千里南海の 椰子の葉繁るサイパン島  
その西南のオレアイに 敵の精鋭第三師団は  
上陸せりと警報に 南雲、斉藤、辻村の  
三指揮官を初めとし マッピー峠の嶮を越え  
タポーチヨ山に防戦を 繰返しつゝ日本の  
寸土をすらも敵軍に 踏ませじものと努めたり  
男の子は兵の銃をとり  
かよわき婦女子は傷つける  
兵をいたわりはげまして 幼き子等と諸共に  
砲煙弾雨のその中に 重き弾薬運びつつ  
恐るゝさまもなかりけり  
時是れ昭和十九年七月七日の激戦は  
怒濤のごとき攻撃を 防がむすべもあらずして  
永く住みにしサイパンを  
敵にゆだねむ無念さよ  
敵の上陸も刻々に  
皇軍遂に全滅し



### 早百合姫物語

松谷 了玄

越中立山には黒百合の花が咲きます。そこには哀婉のうちに呪わしい暗示があるように感じます。天正の昔、富山の城主佐々内蔵助成政の愛妾に富山市五福の産で早百合姫という者がいました。姫は珠玉のように美しく

迫れば今は是非もなし 断崖絶壁の岩頭に  
刻一刻と追いつめられ 逃れむ道もあらざれば  
晴衣に着替へ宮城を 恭々しくも遙拝し  
死出の旅路の薄化粧 長き黒髪梳り  
親子もろとも海中の 千尋の底に身を投じ  
従容として散り果てし 人のためめ憐なま  
泣くか浪間のかもめ鳥 荒天何ぞ無情なる  
砲声止みし明るる日の 浪打寄する海岸に  
兵士のために昨日まで 心ゆくまで手伝いし  
げにいとけなき少年が  
シャツはちぎれてボタンはとれ  
兵にしっかりと抱きつき 漂い浮びあしという  
哀れを茲に留めたり  
南海遠距サイパン島 皇軍玉碎遂不還  
同胞投海殉大義 太平洋上七月風  
あゝ南海の離れ島 鬼神も泣かむ壯烈の  
さだめ哀しく散果てし 四万五千の同胞の  
その英霊を弔わむ その英霊を弔わむ  
(完)

と、夢のように凄艶な早百合姫が哀しい姿をあらわすといわれ、今も呪いの黒百合は立山にさびしく咲いています。



「越中伝説集」より

### 三美会琵琶祭り演奏会

爽秋の十月六日三美会主催の琵琶祭り大演奏会が京都の名刹東寺境内に新築された洛南会館三階大ホールで正午から華々しく開催された。三美会は京都琵琶協会員矢吹華水、田中鶴水両氏の主宰に成るもので、この会には協会員が出演の有無に拘らず挙って応援した。当日入口や会場には各方面から贈られた数個の花輪で美々しく飾られ、舞台中央には最近田中氏入授の琵琶を抱く高さ三十センチの銅製弁財天を安置して献火し、京阪神一流の各派琵琶人を網羅して七時まで競演の絵巻が繰り広げられ、五百の椅子席は超満員の盛況で終始した。

終演後一階ホールで慰労懇親の宴が開かれ、折りから来場の鹿兒島県無形文化財保持者萩原秋彦先生の音頭で三美会の万歳を三唱して解散した。尚当日先着来聴者にお土産品を呈上され、又出演者全部に記念品が贈られた。因みに三美会では今後毎年一回琵琶祭り大会を計画されている。(出演者と曲目 別項「よもやま」欄参照)

### 三美会に参りて

井上 兼子

気づかわれし み空も晴れて催しの しあわせ思ひ東寺前に下りぬ  
広きホールに人満つる中を漸くに 空席見だし座を得たり  
次ぎ次ぎと御力演も快く 弁財天も絢爛に見し  
今聞きし琵琶の数々味わいつゝ ふと見やる東にまどかなる月  
左下より刻々蝕(むしば)まれゆく月を 帰途の車窓にあかず眺めし

高橋藤水氏 函館の同氏が観光のため入浴観迎会 浴されたので京都琵琶協会主催の歓迎茶話会を九月二十二日夕美登里進水女史宅で開催、伊吹正陽、田中鶴水、中島眞水、梅原旭壽、古谷寛水、水内媿水、美登里進水、平井春嶺、植村寛水外二人が集り夫れぞれ寸演の外高橋氏の吟詠などが披露され浅酌を傾けて和氣霽々裡に九時解散した。

大阪琵琶同好会の 台風一過菊薫る九奈良春日大社奉納会 月二十九日午後上記の琵琶詩吟大会開催。秋晴れの好天に恵まれて行楽客で賑い大社参詣の人も多く古典琵琶の音が鹿の鳴声に和しいつ迄も人の群は去らなかつた。尚三時から奈良ドリムランド大劇場で明治百年記念秋季琵琶詩吟諸芸大会が催され七時盛會裡に終了、入湯夕食後解散した。常陸丸一田中よし子、菊水の旗、島津旭抱、橋中佐一矢野旭信、本能寺一辻旭城、明治百年を迎う！島津旭女、乃木將軍鹿島詣！石橋旭嶺、江戸の花籠原妙紋、外に詩吟五

### 題。

たので、成政はたあいもなく熱愛しました。奥女中どもがその寵愛を奪われることを氣遣い、小姓の岡島金一郎と通じていると申し出たため、嫉妬心強い成政は一も二もなくそのざん言を信じて、金一郎を矢庭に手打ちにし、早百合姫をば無惨にも神通川沿岸一本榎の下につれ出し、鉸鎌斬りにしました。早百合姫は血に染まり髪を振り乱した物凄姿で成政を睨みつけ、「もしも立山に黒百合の花が咲けば妾の怨みが通ったのです、きつとあなたを滅してしまします。」と断末魔の苦しみの中から叫びました。しかし剛胆強勇の成政はそんなことは少しも氣にかけません。そのうち豊臣秀吉と兵を交え、国内で戦争する毎に敵の小勢が早百合のたたりで大勢に見え、いつも敗走して降参の止むなきに至りました。やがて天正十六年の夏、成政は秀吉の機嫌を損いましたので、北の政所に取りすがり、何か珍らしいものをとて態々家来を靈峰立山へ遣わし、さがして来た黒百合の花を青竹に入れて北の政所に献上しました。黒百合の魅力に政所はひどく満足しましたが、この黒百合のため北の政所と淀君との間柄を悪化する動機をつくり、北の政所にも疎まれるようになって、自分に味方するものを失い、ついに摂州尼が崎で屠腹し、家を滅ぼすようになりましたのは偏えに早百合の怨恨なりと伝えられます。

後世、成政が早百合姫を殺した富山の磯部堤防の一本榎を三度廻って早百合の名を呼ぶ

京都琵琶協会 十月十二日(土)午後一時  
十月定例茶話会 市内徳雲寺で開催。爽秋の半日を左記会員が集り去る六日催された三美会の琵琶祭り演奏会の全部の録音テープを聴きながら反省会に続いて同二十七日催される協会主催の具体的打合せや準備並びに芸談に花を咲かせた夕飯後八時半散会した。出席者平井春嶺、美登里進水、水内媿水、木村維水、矢吹華水、梅原旭壽、中島旭壽、田中鶴水、伊吹正陽、植村寛水、四明会杉本治作の諸氏。

忠 臣 西郷隆盛ははじめ五千人の薩摩没者追悼式で始めて官軍と一緒に弔われた。軍人県といわれるだけに成辰の役から太平洋戦争まで戦没者は八万人もあるが鹿兒島市の護国神社に祭られているのは官軍、皇軍の将士だけで西郷さんら反乱軍の五千柱はこれまでに南州神社に、差別されていた。一賊軍の汚名は一時の物的なもの。維新の主役は何と云っても西郷どん。「という大方の県民の意志と、明治百年を考えた県の措置。西郷びいきの薩摩軍人一同、この百年目の、恩報」にほっとしている。(朝日新聞から)

(予 告)  
京都琵琶協会十一月茶話会 十一月二日(土)午後一時から市内千本出水西上ル徳雲寺で。当番幹事の中島旭壽、中島眞水両氏。  
蓮水会演奏大会 十一月三日(日)正午一六時  
西宮市夙川駅前西宮市民館。琵琶十四(錦心流十一、薩摩一、筑前一、琵琶舞一)吟詠二十一、詩舞三、剣舞一、挨拶辰馬西宮市長。筑前旭会全国大会 十一月二十二、三両日